

# 弁証法による社会福祉の本質

南 牧生

帝京平成大学 現代ライフ学部 人間文化学科

## Dialectical Essence of Social Welfare

MINAMI Makio

Faculty of Modern Life, Teikyo Heisei University

### Abstract

Dialectically speaking, the essence of nursing is to help people manage life to minimize the loss of their life force. From this viewpoint, the paper aims to provide an accurate definition of care and (social) welfare, emphasizing that: i) the essence of care is to complement daily activities and promote the quality of life; ii) the essence of welfare is to support people individually in their attempt to become and remain happy; and iii) the essence of social welfare is for each of the members of society to make such efforts mutually.

**キーワード：**南郷継正，薄井坦子，弁証法，海保静子，認識論，生活支援，否定の否定，量質転化，対立物の相互浸透。

### はじめに

筆者は、弁証法を理解しようと20年間努力してきたが、いまだ勉強不足で、それを理解出来たと言うことはできない。しかし、理解できている範囲で説明すると、弁証法とは次のようなことである。

よく聞く話に「卵が先か鶏が先か」論争がある。これは学問的には、地球が出来た過程や生物が登場した過程を進化論で証明しようという立場と、人間は神様がお作りになったという立場との論争である。単細胞生物が分裂を繰り返して進化したという立場を唯物論、神様がお作りになったという立場を観念論と言う。神様がお作りになったとしてしまうと、そこで話が終わってしまうので、地球の生成から生物の進化まで、いのちの歴史を繰り返して、人類は現在に至っているという唯物論の立場をとることにする。これらは、本田克也ほかの著作『看護のための「いのちの歴

史」の物語』2007年1月（現代社白鳳選書）<sup>1)</sup>で詳しく説かれているので、それらを参照していただきたい。

人間は産まれてくる時に、母親の子宮の中で「人類の歴史」を繰り返して誕生する。したがって「卵が先か鶏が先か」の答えは「卵が先」が正解であるという立場をとることにする。地球と人類の歴史を紐解いていって、何か共通の法則みたいなものを見つけ出せないかと考えた学者たちが、様々な事象から帰納して、幾つかの法則を導き出した。その代表的な人物が、ドイツではヘーゲルやエンゲルス、日本では武谷三男や三浦つとむである。これらの法則は、簡単に言うと「量質転化の法則」「否定の否定の法則」「対立物の統一の法則」に集約されている。これらを「弁証法」という。他にもあるのかもしれないが、筆者が一般的だと考えるのはこの三つである。これらの法則に従って考えると、様々な矛盾を克服することができる。唯物論

的立場に立つ弁証法が、唯物弁証法というわけである。世の中に共通の法則として導き出された弁証法なので、これを逆に、科学的研究の武器として利用することができる。弁証法というと人文科学的なイメージがある言葉であるが、実際には自然科学的な研究に多く利用されている、当然、社会科学の分野にも演繹可能である。15年ほど前に、これを社会福祉に適用できないかと考えたのが、この研究の始まりである。

社会福祉の科学化、いわば科学的社會福祉論の構築が、この研究の目的である。科学とは、実践を理論化し、体系づけたものである。研究対象は、生活者一般であり、また社会福祉従事者でなくてはならない。生活者一般は人間であり、社会福祉従事者も人間である。人間である以上認識をもっているが、その認識は、一人ひとり個別的なものである。言い換えると、人間の認識は一人ひとり違うものである。あくまでも、研究対象を生活者一般である人間として、それらの認識の中で十分役に立つ研究でなくては意味がない。過去の社会福祉が社会福祉の全てではない。現代の社会福祉のみが社会福祉の全てでもない。社会福祉は法律や制度、援助者と被援助者が相互浸透しながら発展してきたのである。そのような視点から現在にも当てはまる社会福祉とは何かを理解することが必要である。社会福祉を歴史から学ぶことは非常に重要なことであるが、歴史を現在に至る過程として捉える視点が弁証法的視点である。

社会福祉学の構築は、先達（その道の先輩）方々が目指した道である。しかし、一見して、医学や看護学と社会福祉学との格差は、歴然（明白なさま）として見受けられる。大変残念である。我々が目指すのは、医療と福祉の格差（専門職の給与体系にも現れる）を縮小することである。医療には医学があるように、福祉にも福祉学が必要である。すなわち生命を守るのが医療なのだとすれば、生活を守るのが福祉なのである。医療の理論と体系と技術を研究する学問が医学だとすれば、福祉の理論と体系と技術を研究する学問が福祉学なのである。

現在の福祉サービスは、現金の支出を必要とする。年金生活者の場合、年金額にもよるが、生活レベルが中流であったとしても、家族に要介護者がいたら生活は破たんする。預貯金を切り崩し、ローンが払い終わったマイホームを売却し、安アパートで生活保護を受けながら、要介護者が亡くなるのを忍耐強く待つというのが、現在のわが国の社会福祉制度若しくは社会

福祉政策の仕組みである。この事を、為政者、官僚が理解しているかは、大変疑わしい問題である。社会福祉の理論を一般的に解り易く再措定することが可能になれば、それは大いに生活者の意識に影響を及ぼす。社会福祉とはなにかを、一般国民に一般的知識として浸透させることができれば、社会は相互浸透的に変化する。それを成し遂げることによって、社会に蔓延している、福祉切捨てに歯止めがかかり、反福祉政策を福祉政策に変更させることができる可能性が生まれるのではないかと考える。

## 1. 科学的学問体系とは

科学的福祉論の構築には、社会福祉の本質と構造と現象との検討と理解が必要である。すなわち、社会福祉とはどのようなものなのか、社会福祉の体系はどのように構成されるべきなのか、その政策にどのように反映されるべきなのか、また、社会福祉の理論は、社会福祉の現場でどのように実践されるべきなのか、これを検討して分かりやすく理解することである。社会福祉の理論を一般的に解りやすく再措定（再び取り出してはっきりと固定する）することが重要である。

弁証法の立場で医学を研究している瀬江千史氏は、一般論（仮説的本質論）を導き出すために、対象的事実が最初に現れている姿（現象）と、その内側（構造）を理解して、弁証法的統一をすべきであると主張している。そして、弁証法の立場で看護学を研究している薄井坦子氏が、学問の体系を構築するには、どのような対象に（対象論）、どのような意図で（目的論）、どのようにして展開するのか（方法論）を含んでいなければならないと主張している。それらの主張を受けて、対象的事実を社会福祉に据えて、事実全体に共通する本質レベルの一般論（＝科学的本質論）を導き出すためには、構造論を内包することが必須であると考えた。そして、弁証法的構造論には、薄井坦子の言うように、目的論、対象論、方法論が盛り込まれるべきであると考え、自分なりの構造論の構築を目指した。

「科学とは認識であり技術は適用である」とは、世界的物理学者と言われている、武谷三男が『弁証法の諸問題』（勁草書房）という本で定義した言葉である。さて、「認識」とはどのようなものか。海保静子によると「個人の認識は、その原基形態は反映によって成立する。対象を反映することにより、その像が脳の機能として成立するのである。2）」ということである。

また、南郷継正によると、「認識とは唯物論の立場からは、外界にある実体から五感を通して反映したものが感覚として脳細胞に形成された像をいいます。～中略～五つの感覚器官を通した感覚が相互浸透レベルで合流合成されて、感情としての像を形成しているものを認識というのです。<sup>3)</sup>」ということである。したがってここでの理解は、認識とは人間の頭脳活動にあり、科学とは論理構造を解くことであるということである。筆者が学問として社会福祉に取り組むことを志した原点が、南郷継正の一連の著作であるが、その中に次の一文がある。

「学を構築するとは、自分の専門とする個別科学、たとえば政治学や経済学や言語学や物理学や生物学や医学等の対象の構造にわけいて、その論理化を果たし、それを本質論・構造論・現象論として体系化することをいいます。<sup>3)</sup>」

そして、自分の専門とする個別科学として社会福祉を選択した以上、社会福祉に対し、学問として取り組む姿勢を大切にしていきたいと考える。社会福祉を学問として位置づけ「科学的」な「学」の確立を目指すならば、その現象論から始まって、構造論、本質論の構築を目指す必要はない。学問が人間の究明である（瀬江千史『医学の復権』）とすれば、福祉学は、「人間の幸福は何か」を領域として措定すべきものであるという視点を、常に持ち続けなくてはならないと考える。

まず前提として「社会福祉学」と言う言葉は存在する。言い換えると、既に一般的に使用されるようになっている。岡村重夫、京極高宣、竹内愛二、船曳宏保、古川孝順をはじめ、社会福祉学の名称を使用した多くの著作が出版されている。また、現代社会福祉事典の初版では、社会福祉学について、真田是が「〈社会福祉学〉というものが成り立つかどうかは、まとめて論争されたことはなかったが、多くの研究者の頭のなかにあったことである。すでに1950年代初頭の〈社会福祉本質論争〉において、田村米三郎と雀部猛利がこの名称を使って論争に参加している」と記述している。そして、古川孝順の言葉を借りると、社会福祉は、次のように概念規定される。

「社会福祉とは、現代社会における社会政策の一つであり、生活者としての個人・家族の自立生活を支援

し、その自己実現と社会参加を促進するとともに、社会の統合性を高めることを目標に、多様な社会サービスと連携しつつ展開される一定の政策・制度、ならびに援助の体系である。<sup>4)</sup>」

「社会福祉とは、現代社会においてバルネラブルな状態にある人びとに対して社会政策として提供される多様な社会サービスの一つであり、各種の社会サービスに先立ち、またそれに並んで、あるいはそれを補い、人びとの自立生活を支援し、その自己実現、社会参加、社会への統合を促進するとともに、社会の公益性と正統性を確保し、包摂力と求心力を強め、その維持発展に資することを目的に展開されている一定の組織的な施策の体系およびそれにかかわる諸活動ならびにそれらを支え、方向づける原理の総体である。<sup>5)</sup>」

社会福祉学は、社会学や法学、経済学・経営学、心理学、看護学などの周辺諸科学から分化した学問とも考えられるが、かつては、対象分野があまりにも広範であることと、名称先行により、理論化の遅れのため社会福祉学の成立には、難色を示す意見もみられた。しかし、社会福祉学の構築を目指した諸先達（その道の先輩）の業績により、既にその成立自体に異論を挿入する段階は過ぎたと考える。まず、従来の社会福祉研究者が提起した社会福祉の概念は、各々のレベルでは、全て正しいことを前提とする。

歴史は、現象の一形態に過ぎない。しかし、そこには構造をはらんでいる。現象論的歴史論と構造論的発展史は相互浸透する。世界は変化している。その変化の仕方は、弁証法的である。逆に言うと、世界の変化の在り方から帰納して、導き出された法則が弁証法である。したがって、その弁証法は、様々な分野に演繹可能である。変化の仕方は一様ではなく、それが量質転化であったり、否定の否定であったり、対立物の相互浸透であったりする。「福祉」の在り方も「社会福祉」の在り方も変化している。したがって、歴史のそれぞれのある時点での福祉と社会福祉の在り方が存在したように、その時点での福祉と社会福祉の在り方から、その本質を抽出しなくてはならない。従って、各々の社会福祉研究者が提起した社会福祉の概念を尊重し、それを学ぶことによって先に進まなくてはならない。

しかし、従来の社会福祉の概念規定は、社会福祉をひとことで言い表そうとするため、その多くが、表現

が長く、研究者以外の人たち、学生や利用者を含む国民一般には解り難いものとなっている。各々の研究者の社会福祉の本質の共通部分を抽出し、社会福祉を国民一般のものとするには、過去の研究者の社会福祉の概念規定を一旦否定し、それを各々のレベルに分解し再指定して、それを再統合しさらに整合性をとることによって、学生や利用者を含み国民一般に解りやすく構築すべきだと考える。その本質を解り易く理解できるようにすることが、現在の社会福祉の課題である。社会福祉学は、自然科学、人文科学、社会科学など全ての科学からアプローチが可能な学際的領域の学問である。諸先達の業績に甘んずることなく社会福祉の本質論の構築を目指して精進しなくてはならない。本来であれば、過去の研究者の社会福祉の概念規定から帰納する形式をとるべきであるが、紙面の都合上、それは今後の課題として別の機会に行うこととさせていただきます。今回は、唯物弁証法の論者の理論から展開したい。瀬江千史は、次のように述べている。

「一般に科学的な学の確立に関しては、いかなる分野であっても、個々の事実に共通する論理を導きだし、その論理の特殊性の一般的把握からしだいに事実全体に共通する本質レベルの一般性を導き出す作業をなし、またその一般性と特殊性の統一をはかるなかで、一般的な体系を構築する作業がなされるべきである。<sup>6)</sup>」

解り難い文章なので、用語の解説を加えると次のようなことである。広辞苑によると、「一般」とは普遍であり広く認められ成り立つこととされている。「的」とはその性質を帯びる意味を表す。とすれば、「一般的」とは、あるものに共通であるさま、または、あるものの大部分に共通である状態である。「一般化」とは特殊なものを捨て共通なものを残すことによって一般的なものを作ることである。「一般性」とは一般的であるという性質で、普遍性のことである。さらに「一般論」とは、個別的・具体的な問題を保留し一般的な事柄を論じることである。従って、「福祉の一般論」を把握するためには、我々の専門分野である社会福祉を、一般性レベルで「論理的・理論的」に筋を通して把握しなくてはならない。「論理」とは、思考の法則ですじみちが通ることであり、「論理的」とは、論理の法則にかなっており、すじみちが通っていることである。「理論」とは、個々の事実や認識を統一的に説

明することのできる普遍性をもつ体系的知識であり、「理論的」とは、理論に基づいていることである。そしてその、それぞれの理論に一貫性があることが大切なのである。

「一般概念」は、多数の事物・表象間の共通の側面・性質を抽象して構成されるものである。社会福祉の本質を理解するためには、それぞれの事象からその特殊性を抽象して、そこから一般性の抽象へと発展させなければならない。周知のように社会福祉は、目的意識をもった実践であるから、これらの特殊性を抽象することは可能であろう。抽象とは、事物または表象のある側面・性質を<sup>も</sup>引き離して把握することである。その際に、引き出した側面・性質の残りの部分を排除することを捨象という。社会福祉のそれぞれの事象から特殊性のないものを捨象し、一般性として把握し、抽象化していく作業の中から「社会福祉」の本質が理解できると考えている。言い換えると、「社会福祉」を学として構築していくためには、「社会福祉」の現象から学び、それらから帰納してその特殊性を抽象しそれを一般化する作業と、一般性として導き出された論理を、社会福祉の対象や事物に演繹して検証する作業を、何度となく繰り返しながら、その構造を解明しつつ本質に迫っていかなければならない。その気の遠くなる作業を、すでにある程度成し遂げつつある、関連分野の専門性から学ぶのも、後発の「福祉」学としては、有効な手段だと考える。まず、長い引用となるが、社会福祉を「科学」として究明するために、再び瀬江千史『看護学と医学（上巻）』の次の一文を参考にしたい。

「科学的構造論は、まずは自らが専門とする事実にかかわって、現象論レベルから導き出した一般論（＝仮説的本質論）をしっかりと把持したうえで、専門とする対象的事実とまさに格闘するというレベルで研鑽し、一般論からその対象的事実に向かって常に問いかけつづける流れのなかで、しだいに対象的事実が明らかとなってきて、その内側すなわち構造がみえはじめてくる過程を必要とする。そしてここから対象的事実が最初に現している姿（現象）と、その内側（構造）とが分離してみえる流れをとおして、それがしだいに一体的につながってみえはじめることになるものであるが、これらがそうなりはじめると直接に、対象的事実の構造に分けいって個々の事実に共通する論理を導きだし、その論理の特殊性の一般的把持から

しだいに事実全体に共通する本質レベルの一般論（＝科学的本質論）を導き出す過程をくりかえすなかで、すなわち一般から具体へ、具体から一般へという認識にいわゆるのぼりおりをくりかえす過程で、その過程的構造が構造論として構築されていくことこそが、まさに学問としての、対象の構造にみあった構造論の構築過程なのである。<sup>7)</sup>

## 2. 弁証法的「看護」の本質

前節の瀬江千史の『看護学と医学』から引き続いて、薄井坦子の『科学的看護論』を検討していきたい。我が国の社会福祉学の歩みの中で、唯物弁証法によって社会福祉を理解しようと試みた代表的研究者は、岡村重夫と孝橋正一の二名である。その代表的著作は、岡村重夫が『社会福祉原論』、孝橋正一が『全訂社会事業の基本問題』である。社会福祉を理解する上で、この二名の偉大な先達から学ばずに、なぜ看護学の薄井坦子から援用するのか疑問に思われる向きもあるだろう。代表的研究者の概念規定は項を改めるとして、この両名の理論にはここで少しふれておきたい。岡村重夫の研究としては、2002年9月出版の松本英孝『日本の社会福祉学—岡村重夫とその批判者たち—<sup>8)</sup>』が傑出している。しかし、岡村重夫の代表作である名著『社会福祉原論』には、「社会福祉」の定義は規定されていない。岡村重夫の社会福祉の定義としては、『現代社会福祉辞典』にも記載されるように「現代の社会福祉は、個人の社会関係の主体的側面になつて個人の社会参加を援助することである」というのが代表的なものであろう。孝橋正一の「社会福祉」の定義は、文化・教育政策、保健・衛生政策、労働・社会政策、児童・婦人政策や行刑・犯罪政策などとそれらの総計である上位概念または総合概念として理解せられるとあり、そして「社会事業」の定義は次のとおりである。

「資本主義制度の構造的必然の所産である社会的問題に向けられた合目的・補完的な公・私の社会的方策施設の総称であつて、その本質の現象的表現は、労働者＝国民大衆における社会的必要の欠乏（社会的障害）状態に対応する精神的・物質的な救済、保護および福祉の増進を、一定の社会的手段を通じて、組織的に行うことに存する。<sup>9)</sup>」

薄井坦子の『科学的看護論』による看護の概念規定をこれと比較して検討してみたい。フロレンス・ナイ

チンゲール『看護覚え書』には、看護とは「—こういったことのすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするように整えることを意味すべきである。<sup>10)</sup>」とある。これを継承発展させた、薄井坦子の科学的看護論から引用する。

「看護とは、生命力の消耗を最小にするように生活過程を整えることである<sup>11)</sup>」

孝橋正一の「マルクス弁証法」に対する批判は他の著作に譲るが、まず、孝橋正一の「社会事業の定義」と薄井坦子の「看護の定義」を比較してみよう。薄井坦子のほうが、弁証法的にも、看護を、短い、簡単な言葉で、しかも的確に表現していることがわかりいただけるのではないだろうか。科学的看護論とは、言い得て妙（甚だ巧みで美しいこと）である。この、この看護の本質論には、その構造論である目的論「消耗を最小にする」と対象論「生命の消耗を」と方法論「生活過程を整える」がしっかりと盛り込まれている。まさしく弁証法的である。したがって福祉の本質を検討する上でも、その本質論が構造論を内包すること。すなわち、目的論、対象論、方法論を盛り込むことが肝要である。先述したように、従来の研究者の概念規定は、各々の段階で、全て正しいことを前提とする。しかし、各々の段階での社会福祉をひとこと言い表そうとするために、孝橋正一をはじめとするその概念規定の多くが、表現が長くなり、研究者を除く、学生や福祉利用者を含む国民一般には解り難いものになっていることは否めない。これが、岡村理論や孝橋理論から援用せずに、薄井坦子の科学的看護論から学ぼうと考えた理由である。

## 3. 「介護」の概念規定について

薄井坦子の言葉を借りれば、「人間とは、認識をもつ有機体が社会関係のなかで互につくりつくられる諸過程の統一体である。」「これは人間としての共通性をとらえた概念であるから生物体と定義した。」「生活とは、人間が自己の脳に支配されて他の人間と直接的・間接的な社会関係を維持しつつ営む生存過程そのものを言う。」「この生活のなかでつくられる側面を生活体と定義した。」「個々の人間は生物体と生活体の統一体である。<sup>11)</sup>」ということである。

社会福祉における介護分野は、よく看護と比較されることがある。介護と看護は、共通点の多い分野であ

る。福祉について検討する前に、「介護」について検討し、「社会福祉」研究の足掛かりにしたいと考える。再び、薄井坦子の『科学的看護論』から引用する。

「目的意識をもった実践は、すべて対象→認識→表現という過程の構造をもっている。したがって、学問の体系としては、対象についての理論、認識についての理論、表現についての理論が相互の関連において構築されることを必要とする。すなわち、どのような対象に（対象論）、どのような意図で（目的論）、どのようにして展開するのか（方法論）を含んでいなければならないのである。」（薄井坦子『科学的看護論』）<sup>11)</sup>

薄井坦子は、「生活」を、「人間が自己の脳に支配されて他の人間と直接的・間接的な社会関係を維持しつつ営む生存過程そのものを言う。」と規定した。ここで、岡村重夫の社会福祉における「生活」（『社会福祉原論』）と比較してみよう。岡村重夫は、「生活」を「個人が社会生活上の基本的欲求を社会制度を利用することによって充足する過程であった。つまり個人と社会制度との間の社会関係によってはじめて成立するものであった。<sup>12)</sup>」このように述べて、「生活」とは「社会関係」とであると結論づけている。

これらを援用して生活とは何かを検討してみよう。人間は、自らの認識によって、自然的外界、社会的外界と相互浸透することによって生きているのである。それが共生である。これを踏まえて、「人間が自己の脳に支配されて」を「認識」に置き換え、「直接的・間接的な社会関係」を「共生」に置き換えて整理すると、「生活」とは下記ようになる。

生活とは、人間がその認識を持って、他の人間と共生しつつ営む生存過程である

この「生活」の概念規定も岡村重夫の言う「社会関係」を内包していると考えられるので、この整理も概ね一般的なものと考えて差し支えないだろう。

薄井坦子の看護の定義には、看護の対象が「生命の消耗」とされとおり、「誰に対して」という対象にはなっていないが、当然のごとく看護の対象は、看護されている人間であり、その人の「生命の消耗」と考えて間違いないであろう。さて、それに引き続いて、看護と介護の共通点と相違点を検討したい。看護と介護の共通点は、対象となる人間の生活に係わる点にある。相違点は、医療行為との関係性の濃淡である。看

護の対象者が「患者」と呼ばれるのに対して、介護従事者（専門職）による介護の対象者は、現在では「福祉サービス利用者」と呼ばれる。家庭看護等の対象者や家庭介護等の対象者はここでは一旦除外して、看護師によるものと介護士（介護福祉士等）によるものに限定して考えてみよう。広辞苑によると看護とは「<sup>しょう</sup>傷病者に手当てをしたりその世話をしたりすること。看病。」である。介護とは、「高齢者・病人などを介抱し、日常生活を助けること。」とある。共通点は世話をすることであり、相違点は手当と介抱である。ここでも、看護と介護の相違点は、医療行為との関係性の濃淡であると言えるだろう。

さらに、介護の内容を検討すると、「社会福祉士及び介護福祉士法」によると、介護福祉士は、「専門知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障があるものにつき入浴、排泄、食事その他の介護を行い、並びにその者の介護者に対して介護に関する指導を行うことを業とする者をいう。（法改正前）」「介護福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき心身の状況に応じた介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行うこと（以下「介護等」という。）を業とする者をいう。（法改正後）」となっている。さらに、ミネルヴァ書房の『社会福祉用語辞典』によると介護とは、「人間の出生と同時に必要不可欠な行為であり、人間が生きていくなかで、心身に不自由が生じ身の回りのことが自分自身でできなくなった時、誰かが世話をすることを示すとともに、より特定された文脈（社会福祉の分野の固有の用語）での行為を示すものとして用いられる場合が多い。現状では社会的に承認されるまでの共通した介護の定義はない。」とのことである。介護福祉の領域では、ADL（日常生活動作）と言う用語が頻繁に使用される。これが所謂、入浴、排泄、食事、整容やベッドから車椅子への移乗を指す用語である。介護とは、これが出来なくなった者に対してこれの援助を行う行為を指す。従って介護とは、ADLの補完であり補助行為である。看護の定義づけと同じように対象者の限定のうち介護されている人間を省いて言い表すと、次のようになる。

介護とは、日常生活の営みに不便がないようにADLを補完することである

この定義に使用した補完の意味は、「足りないところを補って完全にすること」である。介護の本質を検討する上で、その本質論が構造論を内包することに留意した。すなわち、目的論、対象論、方法論を盛り込むことに心がけた。この介護の本質には、その構造論である目的論「営みに不便がないよう」と対象論「日常生活の営みに」と方法論「ADLを補完する」を盛り込むように留意した。また、さらに一歩進んで、QOL（生活の質）の概念を盛り込み、その向上を目指すのが現在の介護の概念だとすれば、次のようになる。

介護とは、生活の質（QOL）が向上するように日常生活動作（ADL）を補完することである

この概念も看護の定義と同様、対象者の限定を省いたが、その構造論である目的論「質の向上」と対象論「（被介護者の）生活」と方法論「ADLを補完する」を盛り込んでみた。

薄井坦子が言うように、「一人の人間を、生物体としてのあり方と生活体としてのあり方との統一体として把握しなければ、人間を全人としてとらえたことにはならない。<sup>11)</sup>」のである。看護が、人間の生物体としてのあり方を扱うのに対して、福祉は、人間の生活体としてのあり方を扱うものと考えられる。このような側面から社会福祉を捉えことも、論理的に社会保障と社会福祉の概念規定を考えるうえでの手がかりとなるのではないかと考える。

介護の本質が明らかになれば、おのずと、介護福祉士が、何に関する専門家として、どのような知識・技術を修得しなくてはならないかが規定されることになる。「看護師は、生活の調整の専門家としての知識・技術を修得しなければならない。<sup>11)</sup>」であるとするれば、すなわち、介護福祉士も、看護師と同様に「日常生活動作の補完による生活の調整の専門家としての知識・技術を修得しなければならない。」のである。さらに、社会福祉の本質が明らかになれば、社会福祉士が、何に関する専門家としてどのような知識・技術を修得しなければならないかも明らかになってくるのではないだろうか。

#### 4. 「福祉」の概念規定について

筆者は、看護学は薄井坦子らの手により、科学的学問体系をもつとされている領域であると理解してい

る。しかも、社会福祉及び介護福祉と非常に多くの共通点をもつ。社会福祉を科学的に分析するうえで、非常に参考になり、真に学ぶべきところが多い。看護学の学びを継続していくことも、社会福祉学構築のために大きな力となると考える。「科学とは、事物や現象のなかにひそむ法則性を発見して一般化し、体系化した認識である<sup>13)</sup>」とするならば、社会福祉の現象に分け入ってその法則性を把握する努力を継続することが、「社会福祉」を体系化する有効な方法であろう。



図1. 医療と看護と社会福祉と介護。

医療と看護及び社会福祉と介護の関係性を表現しようとしたのが図1である。医療と看護の関係は、瀬江千史及び薄井坦子の著作に詳しいのでそちらを参照していただきたい。ここでは、社会福祉と介護福祉との関係性の理解することに努めたい。介護は、看護のなかの一分野にもあげられ、先述したように極めて看護との共通点が多い。対象が、患者であるのか、高齢者であるのか、障害者であるのか。また、その場所が、病院等医療施設・機関であるのか、特別養護老人ホーム等社会福祉施設であるのかにかかわらず、介護職も看護職もニーズは高く業務も多い。医療系専門職と社会福祉関係専門職との連携は強く叫ばれている。介護福祉が社会福祉の一分野だとすれば、「介護」は「福祉臨床（実際の現場で行われている福祉実践）」の現れ方のひとつである。介護の現場からのアプローチも、社会福祉の現象を積み上げるために有効である。

前節までに、「看護とは、生命力の消耗を最小にするように生活過程を整えることである」という薄井坦子の看護の定義より、「介護とは、生活の質が向上するように日常生活動作を補完することである」こと、また「生活とは、人間がその認識を持って、他の人間と共生しつつ営む生存過程である」ことを論じた。さて、社会福祉は、「社会」という言葉と「福祉」という言葉に分けられる。「福祉」の「福」は「幸せ」という意味である。「福祉」の「祉」も「幸せ」という意味である。したがって福祉とは、幸福である状態を指すことは言うまでもない。ウェルフェア（welfare）

またはウェルビーイング (well-being) の訳語と併せて検討すると、幸せな状態が現在進行している状態ということになる。さらに、糸賀一雄の「福祉の思想」から援用すると、それはあくまでも一人ひとりの「幸福な人生」を指すものである。したがって、「福祉」とは、「人間一人ひとりの幸福な状態の維持」と考えて間違いないであろう。また、「介護」が「福祉臨床」の現れ方のひとつであるとする、そこに「生活」の視点を盛り込む必要がある。筆者が考える福祉の概念規定は、次のようなものである。

福祉とは、人間一人ひとりの幸福の実現と維持のために生活を支援することである

福祉の本質を検討する上で、従来の手順に従って、その本質論が構造論を内包することに留意した。この福祉の本質には、その構造論である目的論「幸福の実現と維持」と対象論「人間一人ひとり」と方法論「生活を支援する」を盛り込んだ。「介護」の目的論を「営みに不便がないよう」と限定したのに対し、「福祉」の目的論を「幸福の実現と維持」と広く捉えた。「介護」の対象論は、その人の「日常生活の営み」に限定したのに対し、「福祉」の対象論を「人間一人ひとり」とした。この人間は、薄井坦子の定義（科学的看護論）による、生物体と生活体の統一体である。「介護」の方法論は、「ADLの補完」に限定したのに対し「福祉」の方法論を「生活支援」全般と捉えた。

目的論を「幸福の実現と維持」とした。「幸福な状態の維持」に「実現」を加えた理由は、総ての人間は、生まれてきただけで生まれてこないよりは幸福であるという論議は、他の哲学的宗教論に譲るとして、ここでは、幸福な者と幸福でない者がいると考えることにする。幸福であるかないかは主観の問題が多く介在するので、幸福一般を論ずるには多くの紙面を要するが、主観と客観を統合する共同主観的あるいは総合主観的に考察して、幸福な者とそうでない者が存在するのは事実として認識する必要がある。生活を営むための原資の多寡であるとか、心身機能の状況であるとかに一定の基準を設けて、その過不足に着目する必要があるだろう。また、日本語としての「生活の質」の概念の検討も必要である。それらについて一般化する作業は、別の機会に譲るとして、幸福でない者に幸福を実現させるための資源を提供すること、幸

福な者に幸福を維持するための資源を提供することが福祉の目的であるとした。

さらに、構造論には、「生活」とは何かの視点が重要である。方法論たる「生活支援」の「生活」とは、先に概念規定したように、「人間がその認識を持って、他の人間と共生しつつ営む生存過程」である。福祉の方法は、支援であり、援助である。支援と援助の違いは、援助は「助け」であるが「支援」とは、支えつつ「援助」することである。単なる「助け」ではなく「援助する者」と「援助される者」の人間関係の介在を意味する概念として「支援」を使用した。

## 5. 「社会福祉」の概念規定について

ところで「社会」とは何であろうか。これは、社会をどのレベルで捉えるかによる。社会を「国家」として捉えるか、「地域」として捉えるか、さもなければ、都道府県、市町村、町内会・自治会レベルで捉えるかである。また、社会を場所として捉えるか、人間の集団として捉えるかによっても意見の分かれるところであろう。広辞苑によると社会とは、「人間が集まって共同生活を営む際に、人々の関係の総体が一つの輪郭をもって現れる場合のその集団」である。社会が集団だとすれば、それは場所ではなく「関係（集団・人の集まり）」ということになる。集団の関係性は、人々との結びつきまたはかかわり合いのことである。人間関係が社会なのである。それを踏まえて地域社会を考えると、地域は、場所ではなく共同体（集団）として捉えなければならないだろう。これに従って、社会を「集団」として捉えた場合、次の概念が考えられる。

社会とは、人間が相互浸透しながら共生する、各々の段階（レベル）での集団である

集団のレベルを「国家」や「地域」に限定して捉える考え方と「関係」として広く捉える考え方と大きく二通りが想定される。社会を国家として捉える考え方については、多くの異論があることが想定される。社会を国家として捉えた場合、「福祉」と「社会福祉」の違いが「主体」の違いとなる。「福祉」が全ての主体を想定しているのに対し「社会福祉」は「社会」の「福祉」であると限定を加えることになる。社会を国家として捉えると、社会福祉制度が整備される前に、私人である民間篤志家によって行われてきた「慈善事業」が、社会福祉の範疇から外されことになる。これ

らは、従来当然のように「社会福祉」と呼ばれてきたが、これは「福祉」の範疇に分類される。そして、法律や制度が整備された後、それに基づいて実施されたもの、されるものが「社会福祉」に分類されることになる。そうすると、ボランティアは社会福祉ではないのかとの矛盾が生じる。ボランティアとは奉仕の精神である。社会福祉はその出発点を社会奉仕の精神にみることができる。現在の社会福祉は、有給の社会福祉専門職によって担われている場合が多い。しかし、社会福祉では、専門職による支援をフォーマル、家族・友人・ボランティア・近隣住民などによる支援をインフォーマルと呼ぶことがある。フォーマルな支援とインフォーマルな支援は、社会福祉の両輪である。そして、有給の専門職による支援には、奉仕の精神が欠けているかという、それはそうではない。一般的に社会福祉を職業として選択するその出発点に、奉仕の精神がある。これについては後述する。

さて、社会を「関係」と捉えた場合と「国家」と捉えた場合には、矛盾が生じ対立した概念となった。関係と捉えた場合社会の構成員同士双方向的となり、国家として捉えた場合、国家から国民に対する一方通行的となる。しかし、社会福祉の対象を「社会の構成員」と捉えたと、「慈善事業」も「奉仕の精神」も範疇に含める広い概念となり、対立物は統一される。これを踏まえて、「社会」を「関係」として広い概念で捉えたと「社会福祉」は次のようになる。

社会福祉とは、社会の構成員が互いの幸福の実現と維持のために生活を支援し合うことである

社会福祉の本質を検討する上で留意しなくてはならないのは、その本質論が構造論を内包することである。すなわち、目的論、対象論、方法論を盛り込むことである。この社会福祉の本質を、構造論である目的論、対象論、方法論に分解して検討すると、社会福祉の目的は「幸福の実現と維持」であり、社会福祉の対象は「社会の構成員」であり、社会福祉の方法は「生活支援」ということになる。これを松本英孝が、その弁証法性を指摘する岡村重夫の社会福祉の定義と再度比較してみよう。「現代の社会福祉は、個人の社会関係の主体的側面にたって個人の社会参加を援助することである」の「個人の社会関係」を「社会の構成員」の中に含め、「個人の社会参加」を「幸福の実現と維持」の中に含めると岡村理論を発展させた形で包含す

ることができるのではないかと考える。

本質的に福祉の目的は、幸せである。社会福祉の目的は、社会の構成員の幸せである。福祉の対象は、人である。社会福祉の対象は、社会の構成員たる国民である。社会の構成員は、複数の人間である。人間は、一人で生きていけない。そこに、人間関係が生ずる。すなわち、各々の認識が違う人間を理解するためには、観念の二重化が不可避であり、認識論の学びが必要となるのである。福祉の構造を理解するためには、福祉の目的とは何かを検討する福祉目的論を構築しなくてはならない。そして、福祉の対象とは何かを検討する福祉対象論を構築しなくてはならない。さらに、福祉の方法とは何かを検討する福祉方法論を構築しなくてはならない。これらが福祉の構造である。構造と現象を理解するためには、歴史研究と事例研究が必須である。時代時代によって形成され、変遷してきた政策や、その時代に行われていた事例を現象として捉えることで、社会福祉の本質に迫ることが可能となる。社会福祉の本質はあくまで本質であって、政策や技術をもってそれを本質であると言うことはできない。技術が具現される場所が臨床であるが、本質に貫かれ、統合され総合化されるべきものであるが、それ自体をもって本質と言うことはできない。臨床は、現象に位置づけられる部分であり、本質に貫かれて、また方法論と統合されつつ存在するのである。

## 6. まとめ

今回の論文では、本質論を発表することに先走り、その前提となる構造論や現象論の組み立てが後回しになり、前後が逆転した感はあるが、今後は、対象を「社会福祉」に据え、対象の実態や現状を論じ、対象の体系や仕組みを論じることで、本質に迫っていきたいと考えている。さらに、導き出された本質を社会福祉の政策や社会福祉の臨床に展開するのは、今後の課題とさせていただきたい。

科学とは、実践を理論化し、体系づけたものである。したがって、実践の科学である社会福祉学は、必然的に臨床での実践を重視する。社会福祉臨床を理解するためには、社会福祉の実践者である社会福祉従事者（援助者）を理解し、社会福祉の対象である生活者一般（被援助者）を理解し、その現場で行われている実践を理解しなければならない。援助する側の認識と援助される側の認識は異なっている。被援助者の行動は、援助側の思惑通りの結果とならない場合が存在す

る。したがって、援助側である社会福祉の専門職には、観念の二重化が正しく行われる様に、認識論を踏まえた教育が必要なのは言うまでもない。さらに、援助者と被援助者は相互浸透する。すなわち、援助者が変化すると同時に被援助者も変化するのだということも併せて理解しなくてはならない。

社会福祉は、弁証法的性格をもっている。社会福祉は、個人の慈恵的精神、いわばボランティア精神から生まれた。しかし、個人的原因よりも、社会的原因によって生まれる生活困難に対応するために、私的活動は、一旦否定され、法律や制度による社会福祉が重視される。しかし、法律や制度からあふれる個人に対しては、またボランティアリズムが重視されるようになる。これが二重の否定である。奉仕の精神と専門性は、その定義の中で矛盾をはらんでいる。福祉専門職の登場によってボランティアリズムは一旦否定された。しかし、専門職になるための勉強を開始する時点での学生たちの精神には、奉仕の精神が宿っている場合が多いと考えられる。しかし、有給の専門職としての業務は奉仕の精神で行うのではなく、プロフェッショナルとしての専門性によって行われる。しかし、社会福祉の仕事は制度的規定の枠の中だけで行うのではなく、時間内で確実に終了できるものではない。そこに、利用者との人間関係があるからである。人間関係は、時間外に断ち切れる類のものではなく、そこで否定された奉仕の精神が、専門性と統合されるかたちで再否定されて登場するのである。これも二重の否定である。奉仕の精神と専門性は矛盾を越えて統一するのである。

今回は、社会福祉の本質を弁証法的に理解するための試論を展開した。現象も構造も、すべて本質に貫かれていなくてはならない。すなわち、本質に貫かれていない構造は、やがてボロが出て、改編を繰り返しながら消えていく運命にある。筆者は、社会福祉政策は社会保障制度と共通の概念をもつと考えている。政策は、構造に位置づけられる部分であるから、当然に、本質に貫かれていなくてはならない。政策も技術も臨

床も、本質に束ねられてこそ真価を発揮する。本質を度外視しておいて、構造や現象に走ると、瑕疵（あるべき要件や性質が欠けていること）が生ずるのである。本質を十分理解した上で、今後の日本の社会福祉制度は、制度設計の時に、インフォーマルのボランティアリズムもさることながら、専門職による奉仕の精神の発揮を許容する余地を残した、余裕を持たせた制度設計が望まれる。

## 引用文献

- 1) 本田克也ほか(2007):『看護のための「いのちの歴史」の物語』(現代社白鳳選書)
- 2) 海保静子(1999):『育児の認識学』(現代社)
- 3) 南郷継正(1994):『弁証法・認識論への道』(三一書房)
- 4) 『現代社会と福祉—社会福祉原論』2009年3月(中央法規)
- 5) 古川孝順(2009):『社会福祉の拡大と限定』(中央法規)
- 6) 瀬江千史(1995):『医学の復権』(現代社) 31頁.
- 7) 瀬江千史(1997):『看護学と医学(上巻)』(現代社)
- 8) 松本英孝(2002):『日本の社会福祉学-岡村重夫とその批判者たち-』(三学出版)
- 9) 孝橋正一(2009):『全訂社会事業の基本問題』(ミネルヴァ書房)
- 10) フロレンス・ナイチンゲール湯楨ます他訳『看護覚え書』(1983):第4版(現代社)
- 11) 薄井坦子(2004):『科学的看護論 第3版』(日本看護協会出版会)
- 12) 岡村重夫(1983):『社会福祉原論』(全国社会福祉協議会)
- 13) 薄井坦子(1994):『改訂版 看護学原論 講義』(現代社)